

# シダ（羊歯）グループ活動報告と茅野市のシダ植物基礎資料

佐藤利幸\* 若宮崇令\*\*

## I はじめに

シダグループの活動は、茅野市八ヶ岳総合博物館の第2期市民研究員養成講座の一分野として今年度より開始した。この講座は3年を一区切りとしているので、今年度はその初年に当たる。参加者は以前の活動にはシダは含まれていなかったため、シダ植物を学び博物館活動に協力してくれる市民は今年度新に募集し、応募してくれた人たちである。10名の応募者があった。皆非常に熱心で、中には毎回東京から特急に乗ってやって来る人もいる。

毎月1回の講座では、まずシダ植物について興味を持ってもらうことから始めた。博物館周辺のシダの生育状況を観察し、必要に応じて採集し、それを室内に持ち込んで専門的な学習を深めた。また、参加者の住居近くのシダを採集し、それを持ち寄ってきてもらい、それを同定し、標本作り、リスト作りをすることで、シダ植物についての学習を深めた。指導は植物研究家、坂口 竣弥氏、岳陽高校教諭、田中 崇行氏に協力を求めた。

もとより、地域博物館の重要課題として、市民参画による地域自然情報の資料蓄積が不可欠と考えた。そのために市民研究員の育成と活躍を希求し、その具体的活動として、日本各地の資料充実が先行しているシダ植物をとりあげ、証拠（標本）を伴った肌目こまやかな茅野市の自然環境資料の集積をめざすものである。茅野市は縄文のビーナスで代表できる5000年の歴史環境をもち寒地植物（カラマツの故郷）を有する八ヶ岳連山を有する。

## II 今年度の活動

2016年4月29日 佐藤利幸 「生命系から見たシダ植物」講演。対象はシダグループ以外の分野の市民研究員養成講座受講者、一般市民も含まれた。

2016年6月4日 佐藤利幸 茅野市の地図に方眼を記入し、採集方法と記録の仕方。採集して持ち寄ったシダを使って、同定の手順について。

2016年6月25日 佐藤利幸 標本作成の手順。持参したシダの同定。博物館東の柳川河岸のシダ植物調査。

2016年7月10日 坂口竣弥 小泉山（下古田口より登山）のシダ植物観察調査。同定。（植物グループと合同）

2016年8月6日 田中崇行 持参した標本の同定作業。シダ植物の歴史についての講義。

2016年9月11日 坂口竣弥 小泉山（わでこずみ口より登山）のシダ植物観察調査。同定。（植物グループと合同）

2016年10月8日 田中崇行 持参した標本の同定作業。シダ植物の分布についての講義。

2016年11月19日 遠山貴士（県自然保護課）「希少植物の現状と市民に期待するもの」講演

2016年12月10日 田中崇行 今後の調査、標本集めについて。持参したシダの同定とラベル作成。シダの進化について講義。

---

\* 信州大学教授 \*\* 茅野市八ヶ岳総合博物館学芸員

2017年1月28日 佐藤利幸 標本作成整理。持参したシダの同定。シダ植物の進化について講義。活動展の展示物について。

2017年2月25・26日 参加者による「活動展」展示作業。佐藤は26日午前中に小山・若宮・小林・鵜飼・山崎さんらと展示の追加を行った。

### III 参加者名 10名

小山 京子 若宮 稔美 奥原 聡 小林 智子 矢島 三喜子 鵜飼 恭子  
 林 秀樹 野崎 順子 山口 明子 山崎 英一郎 (敬称略)  
 上記のような平成28年度(2016年)の活動であった。

### IV これまでの茅野市のシダ調査分布基礎資料

図1. 1996～2016に行われたシダ植物の予備調査地点。図中の数字は地点(100m×100m×100m)での最大シダ種密度である。1メッシュは約625m×650mの範囲となる。

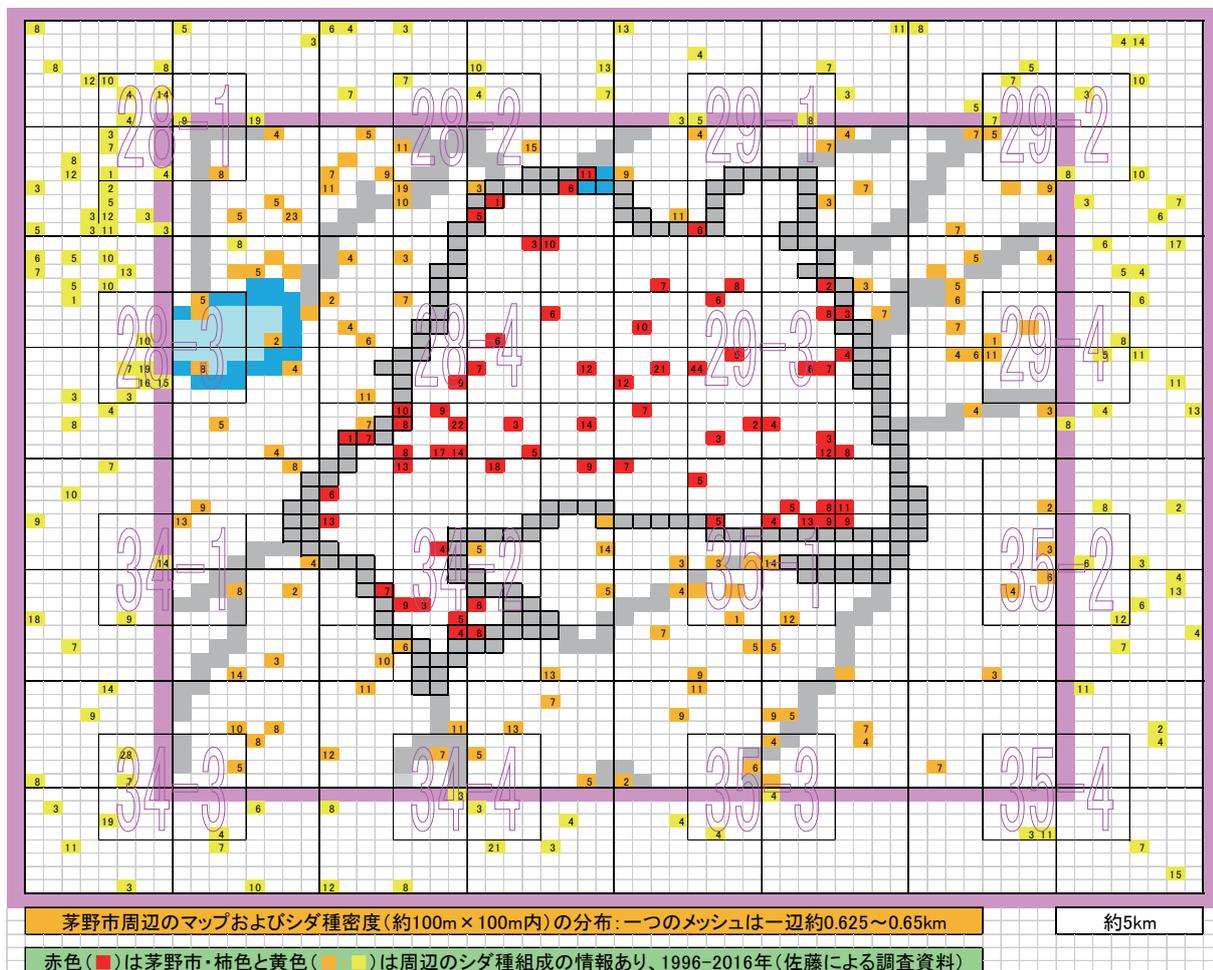


表1. 茅野市のシダ植物の出現頻度。順番は広範囲での見つかりやすさを示す。上位は普通種、下位は希少種を表す。No. 見つかりやすさの順番、F:頻度（確認回数） F/72:72 地点調査での確認比率。

No.	F	F/72	種名	No.	F	F/72	種名	No.	F	F/72	種名
1	62	0.8611	ヘビノゴサ	31	6	0.0833	ナツノハナワラビ	61	1	0.0139	イノトソウ
2	34	0.4722	スキナ	32	6	0.0833	シガシラ	62	1	0.0139	イヌスキナ
3	31	0.4306	オシダ	33	6	0.0833	ミヤマシダ	63	1	0.0139	タニホ
4	29	0.4028	イヌワラビ	34	6	0.0833	クジャクシダ	64	1	0.0139	アスヒカスラ
5	25	0.3472	ハクモウイノテ	35	6	0.0833	シノカグマ	65	1	0.0139	アイノクマワラビ
6	22	0.3056	ミヤマワラビ	36	5	0.0694	ナカホノナツノハナワラビ	66	1	0.0139	イワイチシダ
7	21	0.2917	オウレンシダ	37	5	0.0694	ゼンマイ	67	1	0.0139	イワガネゼンマイ
8	19	0.2639	ヒメシダ	38	5	0.0694	ミヤマメシダ	68	1	0.0139	イワトラノオ
9	18	0.25	イヌガンソク	39	4	0.0556	ナヨシダ	69	1	0.0139	エゾテンダ
10	16	0.2222	トラノオシダ	40	4	0.0556	ニッコウシダ	70	1	0.0139	オシダゲシダ
11	15	0.2083	ワラビ	41	4	0.0556	スキカスラ	71	1	0.0139	カラクサンダ
12	13	0.1806	ホソバシゲシダ	42	3	0.0417	タチヒメワラビ	72	1	0.0139	クモノシダ
13	12	0.1667	オニゼンマイ	43	3	0.0417	ミヤマヘニシダ	73	1	0.0139	ゲシダゲシダ
14	12	0.1667	クサソテツ	44	3	0.0417	キョウキシダ	74	1	0.0139	トヨグチイノテ
15	12	0.1667	ヤマトリゼンマイ	45	3	0.0417	ジュウモンシダ	75	1	0.0139	ナカオノキノブ
16	12	0.1667	シラネワラビ	46	3	0.0417	クラマコケ	76	1	0.0139	ヒメコケキノブ
17	10	0.1389	コウヤワラビ	47	3	0.0417	カラフトミヤマシダ	77	1	0.0139	ミヤマキノブ
18	9	0.125	ミヤマクマワラビ	48	3	0.0417	コケキノブ	78	1	0.0139	マンネンスキ
19	8	0.1111	ヤマイヌワラビ	49	3	0.0417	フクロシダ	79	1	0.0139	ヤワラシダ
20	8	0.1111	イワシロイノテ	50	2	0.0278	サトメシダ	80	1	0.0139	クマオシダ(オシダ・ミヤマクマ)
21	8	0.1111	クマワラビ	51	2	0.0278	シゲシダ	81	1	0.0139	サカゲイノテ
22	8	0.1111	オオホソバシゲシダ	52	2	0.0278	ノキノブ	82	1	0.0139	イワハリガネワラビ
23	7	0.0972	オクマワラビ	53	2	0.0278	アカハナワラビ	83	1	0.0139	ハリガネワラビ
24	7	0.0972	イヌシダ	54	2	0.0278	ミサキカグマ	84	1	0.0139	イノテモトキ
25	7	0.0972	ヤブソテツ	55	2	0.0278	フノハナワラビ	85	1	0.0139	ミヤマウラボシ
26	7	0.0972	ホソイノテ	56	2	0.0278	ミヤマシゲシダ	86	1	0.0139	ミヤマイワテンダ
27	7	0.0972	タネサトメシダ	57	2	0.0278	イトホソワラビ				
28	7	0.0972	ヒカゲノカスラ	58	1	0.0139	オオサトメシダ				
29	6	0.0833	イワテンダ	59	1	0.0139	カラクサ・ヒロハ・イヌワラビ				
30	6	0.0833	ホソバナライシダ	60	1	0.0139	ヤマヤブソテツ				

## V 特記すべき活動記録

上記72地点の蓄積資料(1996～2016)では86種群(種・変種・雑種)のシダ植物が記録されてきた。本年度の調査により、わずか1年で、32種を確認できた小山さん、基礎資料では発見できていないヤツガタケキノブ・ニオイシダ・アオチャセンシダ・ミヤマウラボシなど山岳・寒地性シダをつぎつぎ発見された小林さん、そのほか暖地性シダを庭先で発見されたメンバーが集った。大胆に空想を広げると、おそらく3年間で150種近くのシダ植物が確認できるであろうと考えてみた。その場合、シダ植物と種子植物を含めた維管束(高等?)植物は10倍の1500種、コケ植物・地衣類はそれぞれシダ植物の2倍の300種近くが期待できることになる。3年後には「茅野市のシダ植物アトラス」の編集ができれば最幸であろう。

図2. 蓄積資料のまとめ方の1例。茅野市北西部から南東部にかけての種組成の蓄積資料図示(空間情報)。下部の水色棒グラフは地点ごとの種密度(これを平均するとアルファ多様度)、赤い点は積算種数(ガンマ多様度)。調査確認時期順(時間情報)に配置することもできる。飛びぬけて多い場所は横谷溪谷(20m × 500m)の44種の記録であり、そうした場所は茅野市の局所シダ植物のホットスポットと呼べよう。佐藤の個人的感想として美しい景観(パワースポット)にはいろんなシダ植物が夜空の星のごとく散りばめられている気がする。色とりどりで記録しているのは、作業中の間違いを少なくするためのプロセスが表現されている。区系ごとにまとめて集計するのも経過を楽しむことにつながる。自由な集計法を試みることをおすすめしたい。これは報告書ゆえの特権である。

